

# 地域づくりの社会教育

組 原 洋

はじめに

本稿は、1995年12月16日に、私が沖縄大学地域研究所1995年度第5回研究発表会で発表した内容をもとにしている。

研究発表会のテーマは、同研究所年報第6号（1995年3月）に掲載された拙稿「南北問題と沖縄」に関連するテーマでということだった。したがって、題名からすれば南北問題に関連することということになるはずだが、この拙稿は内容的には私が社会教育と関わる中で考えてことをまとめたものであり、その内容がたまたま南北問題と重なる内容のものだったということである。そういうことなので、研究発表会でも、必ずしも南北問題にこだわらず、この拙稿を脱稿したあとに私が社会教育と関連してやったこと、考えたことをまとめようと決めていた。こうして発表した内容を再構成したものが本稿である。

研究発表会では、社会教育の専門家である平良研一氏がコメンテーターを引き受けてくださった。厚くお礼申し上げます。また、私の発表をきいてくださり、意見を述べてくださった方々にもお礼申し上げます。

## 1

研究発表会のちょっと前に、内容の予告を書くよう求められて、以下のような文章を書いた。

「南北問題や平和の問題を解決していくうえで、社会教育の果たす役割は普通考えられている以上に大きい。社会教育における地域との関わり方を比較の視点から考えてみたい。具体例として、北アイルランドの事例を取り上げてみる。」

そして、レジュメは次のように構成した。

## 1、はじめに

## 2、「南北問題と沖縄」その後

中年鬱ないし燃え尽き症候群

「与える木」

社会教育研究全国集会（山形市、蔵王温泉）

課題別セミナー：「地域づくりと協同組合の学習・文化活動」に参加

分科会：「地域づくりをめざす社会教育実践の展望」に参加

宮古の老人と子どもたち

赤木かん子氏と

さまざまな旅行計画

## 3、北アイルランドの社会教育

鈴木敏正氏著

「平和への地域づくり教育 アルスター・ピープルズ・カレッジの挑戦」

（筑波書房・1995年）をもとに

## 4、まとめ

以下、この順に述べていく。

## 2

まず、中年鬱ないし燃え尽き症候群ということについて述べる。

前記の拙稿「南北問題と沖縄」を脱稿したのが95年1月22日である。阪神大震災直後である。このあと春休みに入ったが、風邪をこじらせて体調を崩し、そのうち3月上旬、「死にたい」病にとりつかれた。ひどいうつ状態だった。

幸い、柴谷篤弘・池田清彦編「差別ということば」

（明石書店・1992年）という本のメモを作りに興味を持てたので、出来るだけその作業をやって時間をつぶしているうち、病気を「忘れて」しまった。しかし、個人的にも折れ目の時期かなあと思ったのである。こういう状態を体験して、うつってのは、マジメ病なんだと思った。いいかげんな人はいないんじゃないか。で、マジメ病にとらわれた時、どういふもんが面白いかというと、「超マジメ」なものじゃないのか。私から見てふざけたのは読む気もしなかった。といっても、力がないので、力がないにもかかわらず好奇心をおこしてしてくれるような、何かそんな力がある。

ところで、その後11月に入ってからか、横井久美子「ただの私に戻る旅」（労働旬報社・1995年）を読んだ。この本はアイルランド自転車旅行記で、著者は有名な歌手だが、燃え尽き症候群にかかって、それをいやすために旅に出たのだそうだ。著者へのインタビュー記事が95年11月29日の沖縄タイムスに載っている。わき目もふらず一生懸命生きてきたら、ふと「私の人生、これでよかったのか」と暗い迷路に入り込み、どんなにあがいても抜け出られなくなったのだそうだ。私の陥った「病」がこれだった、というつもりはないが、すごく分かる気がした。

### 3

次の「与える木」というのは、シェル・シルヴァスタイン「与える木」のことで、邦訳は本田錦一郎氏の訳で「おおきな木」という題で出ている（篠崎書林・1976年）。この本の読後感想文を私担当の法人類学講義の95年度最初の授業時間に出席者に書いてもらったが、これはすでに沖縄大学地域研究所所報11号で活字になっている。この本を講義で取り上げたのは、阪神大震災が大きく影響している。

感想文を一読して一番印象に残ったのは、母と子、ないし親と子の関係のようだというものがびっくりするほど多いことである（父と子とするのは1人だけ）。母子、親子の関係って、こういうもんなん

すか。それとも、こうあるべきなのに、こんなふうではないというのか。それ以外のものを拾ってみると、自然と人間、おばあちゃんと孫、尽くす女と道楽男、男女関係、地球と人間等。木は本当にうれしかったのかと問うものも多い。肯定、否定どちらも見られる。

「与える木」を講義で取りあげる直接のきっかけになった、守屋慶子「子どもとファンタジー」（新曜社・1994年）からのメモを以下に掲げる。

守屋慶子「子どもとファンタジー 絵本による子どもの「自己」の発見」

メモ

まえがき

＊発達心理学の本。材料は「与える木」に対するイギリス、スウェーデン、韓国、日本の子どもたちの感想文。子どもの発達の違いや子どもの個性、子どもの属する社会・文化の違いなどに対応して、感想の内容は非常に多様である。

#### 第1章 ファンタジーの世界の生成過程

＊子どもはファンタジーとしてでなく現実としてとらえる。小学校高学年になると、「幼稚」「無意味」と批判し出す。その時期越すと、一転して意味深い話としてとらえ直す。現実を映したものの。日本ではりんごの木を母に似ているとするものが多い。イギリスや韓国ではりんごの木を神の象徴とみる子どもが多い。スウェーデンの子どもには、りんごの木を惜しみなく与える自然、少年を自然を破壊する人間と見た場合が多かった。

#### 第2章 想像と創造がすすめる物語の理解

＊子どもたちは登場人物の未来を想像する時、彼らの願望や期待をそこに込める。

＊C・S・ルイスは、「残酷なこと」を子供に知らせてはいけないという意見で子どもの本を書いてはいけないという。「創る」行為が必要とされる状況がないと子どもたちは創れない。

この調査でも、この物語が「残酷だ」という理由

で協力を断った人が、イギリス、スウェーデンにいた。逆に日本では、りんごの木のような優しさを教え、少年のわがままを戒めるのにいいという意見が多い。

\*イギリスやスウェーデンの子どもは結論出すまでが非常に速く、中心テーマにずばりと入る。日本はらせん的。個々の細部から積み上げるボトムアップ方式。

### 第3章 他者の認識と「私」の認識

\*情緒の評価から始まり、やがて第三者的立場の認識者となる。

\*児童期後半にさしかかる子はりんごの木を否定的に評価、認識する場合が多くなる。

\*物語の登場人物が子どもたちの理想自己をつくる時のモデルとなり得る。

\*「人間皆同じ」ということになると自分の独自性はどこにあるのか。

### 第4章 感情と認識の関係

\*心理学は研究対象から感情を排除する方向で進んだ。「客観的」じゃないから、と。そういう心理学って何なの？

\*子どもの感情が表現される場合、そこに認識内容が補足されれば大人たちは解った気になる。感情といっても認識と未分化の段階。やがて分化。「木はかわいそう、なぜかという…」

\*感情により認識の焦点が決まる。「かわいそうなのはりんごの木」児童期初期にはりんごの木にまず注目するものが多い。同時に並列的に認識するのは難しい。感情を持つと能動的な認識に移る。

\*やがて少年にも目を向け始める。りんごの捕らえ方も多面的になる。「かわいそう」だけでなく、「すごい」面もとらえる。

### 第5章 子どもたちをとおしてみた社会・文化

\*本音を推量する文化。「木は本当は幸せではなかった」「弱者は強者に本心を見せることによって一層不利な立場に追い込まれることを避けようとする」

(ボリビアの10歳の少女、156頁)。矛盾解消型ではない、二重構造型の推量はイギリス、スウェーデン、韓国の子どもたちには見られない。日本の本音と建前の使い分けを背景としているのか。イギリス、スウェーデンの子にはハッピーエンド。

\*物語の厳密な理解、認識の正確さという点からは日本の子どもたちはイギリスやスウェーデンよりかなり大ざっぱ。

\*Lebra, T. S. らが大人を対象に親切への報酬として何を期待するかについて、中国、韓国、日本を比較。日本では行為を受けた者のinner satisfaction(精神的満足)が最も高い値を示す(中国4%、韓国24.2%、日本45.9%)。これに対して、中国、韓国ではdirect, reciprocal, equivalent repayment(直接的で互恵的な親切に見合ったお返し)が高い値を示す(中国53.2%、韓国39.1%、日本13.7%)。日本人のこの傾向をcreditor's claim(親切をする者の期待)に対する倫理的抑制によるものと説明。お返しを期待しない親切が習慣とされてきた。

このような抑制は、日本の社会集団の情緒的性質に関連するのでは。女性の方が社会的に劣位なので、よりその傾向を強く持つのでは。

\*おわびを言えば済むのか。応分のお返しを期待する社会、文化では親切が対人関係にあって円滑に機能し得るが、日本の社会では無償であるべきだと考えられるため、かえって円滑に機能しない。他人に期待しない自立を求める。

\*応分のお返しは経済的、精神的にゆとりのない場合は嬉しいはずだから、無償の親切をよとする美意識等は社会的に恵まれた方が作り上げてきたのではないか。

\*7、8歳の頃はまだ親等とともに行動。「やさしさ」「親切」を相手に期待→りんごの木に注目。

9、10歳の頃はそろそろ親から離れ、友人関係の中で生活。ルールや約束事が重要になる。対人関係に基づいた正義感→少年非難。

日本の子どもの場合、その後りんごの木に焦点化する場合が再び増える。16、7歳では両方がほぼ

均等。双焦点状態。イギリスの青年は正邪の観点だけから見ののに日本では強弱の観点も混じる。哀れみとか、判官びいき。あわれみ（情緒）が客観的な正邪判断を動かすということは、イギリスやスウェーデンでは見られない。

韓国では16、7歳までの全期間、りんごの木に対する肯定的評価が強い。少年への焦点交替は起こっていない。とりわけ11、2歳でこの傾向が強い。少年への倫理的非難が全体的傾向として現れないのは儒教の影響を受けた倫理的抑制によるのか。

\*少年に自己の姿を見るのは（182頁参照）日本だけでなく、イギリス、スウェーデンでも同じ。しかし自己というときその内容が違ふ。イギリスの子はあくまで「我々」の像と受け止め自分の鏡像とはとらえない。13、4歳で登場人物を第三者的に認識。日本ではWe段階に踏み込むのは高校生になってから。神の概念の有無による違いか。日本では社会の多くの構成員に浸透するような形の人間の対立概念はない。せいぜい対として出てくるのは動物か。それも対立しているんじゃなく、人間もその一部として。

## 第6章 子どもにとって感想とは－感情のバランス回復と自己の発見－

「発達心理学」の視角というのは、何歳ぐらいの子どもなら一般にこういうふうだ、といえるような共通面を抜き出す。この本からすると、小学校低学年、小学校高学年から中学生にかけて、そして更に成長した時期と、だいたい3区分できるようである。

ファンタジーの世界と現実とが重なっている。ファンタジーの世界は未知の現実。「何で木がしゃべるの」「この少年の名前は何て言うの」「お母さんはいないの」

↓

経験が増え知識が身につくと現実の世界からファンタジーの世界が分かれる。「よく聞いていると木がしゃべるのでやっぱり現実ではなかった。」本当

のことを教えてほしい、作り物を与える大人への不信任感。植物が葉を全部落とせば死んじゃうよ。家を作るにはボート以上に材料がたくさんいるはずだが。しかし、作り事だからとあっさり捨てはしない。

「僕もあんな木のような友達があればいいのに」期待や願望に満たされる時期はファンタジーの世界が現実（認識した世界）から完全に分離するまでの過渡期。

↓

こんな単純な話を、自らを「大人」と思っている彼らがなぜ聞かされなければならないのか。登場人物の行動を動機、目的などと共に取り上げ、物語が全体としてどういう「意味」を持っているのかを理解するための道具はまだ手にしていない。何かの象徴？「この木はお母さんみたいだ」現実とは区別しながら、現実似たものを発見。「与えることともらうことについての物語」「関係」

↓

大人はファンタジーの世界を現実世界のコピーとして把握しようとする傾向が強い。したがって、現実世界で経験しなかった新しいものをファンタジーの世界に発見することはあまりない。

なお、子どもたちの自分に対する満足度合いが不満の度合いを上回るのは中学生の頃までで、ほぼこの時期を境にこの関係は逆転する。

ところが第5章「子どもたちをとおしてみた社会・文化」で述べられているように、同じ年頃の子でも国によってははっきりした違いが出る側面のあることが示されている。

こういう側面が文化人類学で言うところの文化（カルチャー）でしょう。法も文化の1つと考えられる。なぜ多様になるかといえば、つまりは人間が「学習」できる存在だからである。こういう多様性ってのはむしろますます多様化する方向に向かうんではないかと思われる。

与えることともらうことについて、もうちょっと考えてみたいと思った。それからまた、家族ってものについて出席者が抱いているイメージがいろいろ



形成されたものなのかも考えてみたいと思った。

与えることともらうことについては、次の本を読んできた。

牧口二「何が不自由で、どちらが自由か」（河合ブックレット・1995年） メモ

I 「障害」とは？「障害者」とは？

\*牧口氏は松葉杖の「障害者」。障害者とは何か。メガネをつけてる人は障害者か。メガネと松葉杖とは、役割でいったらほぼ同じではないか。人数の問題なのか。普通感覚のものは目立たない。

\*質問「次の五つの障害のうち1つを、皆さんがどうしてももらわないといけなくなったとしら。何をもらいたくないか。

- 1、両目が見えなくなること。
- 2、両耳が聞こえなくなること。
- 3、口でものがしゃべれなくなること。
- 4、両手が使えなくなること。
- 5、両足が動かなくなること。

例えばピアニストになりたいとか（どうしても耳とか手を残したいだろう）、カメラに興味を持ち一生続けたい（どうしても目や手足を残したいだろう）とかは度外視して、この障害もらったらちょっと生きていく自信がなくなりそうとかいう気持ちのするものを選んでほしい。」

II 人間が社会で生きる条件

\*一番早く社会参加できた「障害」者は全盲の人である。室町時代か鎌倉時代の終わり頃にもう、全盲の琵琶法師組織ができています。

\*足の動かない人は、「足萎え」「いざり」とかいていた。足が動かなくて困ることは？

走れないーが、なぜ走らないといけないのか。天災だと逃げ足が早い死ぬということもなくはない。普段から人に助けてもらうネットワーク持っているの、健全者よりたくましく生きられるかも。

\*生きようとしている、その生きる道をじゃまされてない人は障害者でないと思う。

\*小さい頃は友達も少なく、いじめられ、54の会社を受けて全部だめで、美術学校の友達が助けてく

れてやっと社会に出られた。

\*人間はひとりで生きていく必要が何にもない。自立というけど、何でも1人でできる人が一人前というのは間違いや。

\*関係が作りやすい障害か、作りにくい障害か。コミュニケーション手段を奪われるのはきついんじゃないか。口とか、耳とか。筆談では冗談も言われへんし。必要最小限書くだけで精一杯。手紙の方がちゃんと交信できるということがある。

\*全盲というのは「目立つ」障害である。

「目立つ」というと日本ではマイナスイメージ。派手ってことじゃなくて、存在感を持つような人間になりましょう。影がうすいってのは生命力もうすいってこと。障害者は割りに努力しなくても目立ちちゃう。それでやりたいことやれるなら健全者よりむしろ有利ではないかと思うこともある。

\*牧口氏の生きやすい条件を整理するとー

- 1、世の中の常識、標準、平均、通念等訳のわからん価値観に惑わされず済む。
- 2、目立つ障害だから、常に回りから気にしてもらえる。
- 3、松葉杖の魔力で他者の力が借りやすい。
- 4、松葉杖があると独りでも行動できるのでプライベートが保てる。

もう少し「まちづくり」が進めば車椅子の方が暮らしやすくなるだろう。

孤立と孤独は全然違う。

牧口氏の障害がもっと重くて、一人ではできないという状態ならこんなのきなこと言えんかもしれないが、今の立場を「軽度だから」と片づけてしまうんじゃないかって、健全者もどうすれば自分の人生から「障害」がなくなり生きやすくなるかのヒントにしてほしい。

\*全盲が最初に社会参加できたのは目が見えんというだけでいろんな仕事できたこと。

「社会参加」という言い方は、社会が正しくて、障害者がそこに仲間入りさせてもらえるというイメージがあって好きでない。障害者問題はそんなちっぽけな問題ではない。障害者が社会に参加していく

ことで世の中がもっと人間味のあるものになっていく問題なのである。「社会進出」と言っている。全盲は社会進出可能な障害だったということ。塙保己一を見よ。「群書類従」という物事の資料集。いくら天才でも1人ではできない仕事をしている。つまり弟子がたくさんいたんでしょう。だから社会進出してたんでしょう。孤立した天才ではなかった。

### Ⅲ ほんとうの自立をやり切った友

\*両手、両足動かない。愛媛に住んでいた。

\*「どんな障害ですか」「どの程度の障害ですか」「いつからですか」で障害者の立場はだいたい見えてくる。生まれつきの「骨形成不全」簡単な振動で骨が折れる。左手の指は良く動くが、右手は全然だめ。腕も全然だめ。足は付け根から2本とも動かない。寝たきり。それが1人で大阪に来た。

\*キャッチボール式歩行法：ベッド式車椅子（所帯道具一切携帯）を通りに出してもらって待っていると、通りがかりの人がリレーで押して連れてってくれる。口だけは達者。頼む時相手に考える余地を与えないのがこつ。相手の行くところまで。それは遠慮ではない。別れて別のの人に押してもらえばより多くの人に出会える。押してくれた人が書いた大学ノートの住所録。3人に1人ぐらいが書いてくれる。

\*「両手両足が動かなくなった時、人に迷惑かけないとか、人にものを頼まないとかいうことは、一生家の中で寝たきりしかない。どうなるか分からんけど、ちょっと人に声かけて、ちょっと人に手伝ってもらうのがそんなに悪いことか。」 「おれら友達とか、そうでないとかいうけど、同じ時代に同じ地球に生きた人間なんで、友達増やすというのは出会っていくことではないか。」

自分でできることは自分でやろうとか、自分でできないことは申し訳ないが手伝ってもらおうとかいうちっぽけな自立観とは違うスケールの大きさを感じた。

\*大阪からそのまま東京に出て、3年後電話があった。いつてみたら、「重度健全者リハビリテーションセンター」って看板。最近の大学生はなってない、飯の作り方知らんのが多いし、おかずも何作るか分

からん、洗濯したら洗剤の使い過ぎ、風呂わかせていったら熱いのばかり。それがちゃんとできるようにになったら「もう社会に出て大丈夫や」といって家から追いつすんだとか。

\*見ず知らずの人に何でも頼めるみたいだったのが、知らない女性にはおしっこさせて下さいといえなくて、我慢した積み重ねで腎臓悪くして死んだ。

\*名前は宇都宮辰範。ペンネームは「ウツのみや」。漫画描いていた。

\*「心身障害者」という言葉に引っかかって、心はどこにあるのやろと考えた時、仲間の精神神経科医が「ひょっとしたら人と人の間」と。つまり人間、と。

\*今、知識偏重で子供はどうしようもなく画一化して来た。「不自由」感じてるのは、障害者より障害持たない子である。そのうっぷんがいじめになって現れる。いじめの原因は確かに複合汚染だが、最大のものはある種の大人たちの身勝手さである。自分のこと、身内のことしか考えない。

\*平等だの、自立だの、共生だのとタテマエぶっておけば誰も反論できないが、画一化しちゃう。

「ちがうことこそばんざい」と言いたい。

解説：趙博（ちょう ばく）

\*阪神大震災で障害者の住宅手当が打ち切られているそうだ。住む家がなくなって、避難所で生活してるからと。つまり、障害者が1人で生活するのは大変だろうから住宅手当出すけど、家がなくなったんだから当然住宅手当はいらんでしょうと。皆さん平等に家がなくなった時は平等にゼロといこうということか。

家族ってものについて出席者が抱いているイメージがいつごろ形成されたものなのかも考えてみたいということについては、前記の拙稿「南北問題と沖縄」の中の「子どもをめぐる文化生態環境と法」を読んでみた。

その後5月の連休に入り、その間4月30日から5月5日まで旅行していた。

4月30日に大阪に出て、5月2日まで神戸周辺を回っていた。もちろん震災後の状況を見るためである。震災後、ボランティア活動していた人々の話も聞いた。いろいろな意味で考えさせられた。5月3日から4日にかけては、奥能登にいった。網野善彦「海から見た日本史像 奥能登地域と時国家を中心として」(河合ブックレット・1994年)で「時国家」に興味を持ち、それを見に行った。この近くに塩田村(資料館)があるのにはびっくりした。

網野善彦「海から見た日本史像 奥能登地域と時国家を中心として」 メモ

\*江戸時代末、紀伊半島の先端潮岬の漁民がオーストラリアまでほとんど毎年のように出かけていたと羽原又吉「漂海民」(岩波新書・1963年)に報告されている。それで、最近の歴史研究者は、「鎖国」とはいわず「海禁」というようになっている。  
\*律令国家は畿内を中心に放射線状に直線の道をつくった。陸上の道。軍事的な意味。インカ、ペルシャ、ローマ、みんなまっすぐの道。8世紀も半ば過ぎるとこの道は維持できなくなった。河川・海を通じての交通体系復活。近代になって、再び陸上交通に完全に依存。島国観。

\*時国家調査のきっかけは40年前の日本常民文化研究所の調査。

阪神大震災に関しては、沖縄に帰ってから読んだ次の本を紹介した。

内橋克人・鎌田慧「大震災 復興への警鐘」(岩波書店(同時代ライブラリー)・1995年)

メモ

(この本は、1995年2月19日に行われた対談の記録)

#### 1、開発と復興ファシズム

\*山の手は電気がついている。大阪は、何くわぬ顔で明るい生活している。

震災後の18日に中川和雄大坂府知事が「被災者

は自分でめしを炊いて食えばいいじゃないか」といったということが共同通信の記事で流れた。

村山首相は地震から10日もたたない頃(1月26日)に、もう「私権を制限する」といった。

同日、貝原俊民兵庫県知事も「禍中に福あり」といって、今までやりたいと思ってもできなかったのに、震災で21世紀都市を作ることが可能になったと語る。

76年10月の酒田大火の時と同じ。

神戸の被災地では、もうすでに建築基準法84条で木造以外の家をつくらないよう抑えている。

私権制限と区画整理によって防災都市をつくろうというのだが、というのが防災なのか誰もよく分らない。

例えば、島原で砂防ダムを10重20重につくるのだが、どこまでが防災の限界でどこまでが過剰設備なのか。奥尻島で7メートルとか9メートルとかの防波堤をつくるとかで海が見えなくなってしまう。

酒田では20%減歩。大地主ならいいが、零細店では商売できなくなる。(K)

\*神戸は、昭和13年に大水害、敗戦の年に大空襲。戦前は自然と都市が共存した町だった。山と海が接している。元町というのが神戸の町の始まり。同時に真っ先に立ち上がる町。ハイカラであり、外国人がいて、勤労者の町でもあった。

アッというまに人工の箱庭になっていった。宮崎市政が1969年に始まってから。20年続く。81年ポートピアが転機。以来変わって変わって原初風景がなくなった。外部の人が市長。現在の笹山氏も鹿児島出身。神戸人というのはコスモポリタンで、同じ地域が故郷だから一緒に集まりましようとはならない。

絵葉書的な神戸は表面だけ。

兵庫区、中央区の、もとは軍需工場の下請けから始まった職住の町を中心にしたインナーシティが空洞化していた。圧死した人のうち50%近くが60歳以上。

元町、南京町の先には差別を受けてきた地域もある。

ゴム工場とかケミカル・シューズの工場。危険な可燃物を屋内にたくさん持っていた。

自動車、エレクトロニクスの下請け。ちょっとした機械加工工場。

海沿いに工場、山すそに市場や商店街、そして住宅地がせり上がっていく。混淆文化。(U)

長田区には、在日朝鮮人2万人、被差別部落民2万人。(K)

\*町工場、関西でいう安普請の文化住宅等に被害集中。

震災前住民に反対されて着工できなかった道路計画を火事場どろぼう的に行おうとしている。

2/15臨時市議会で私権制限の極めて強い「神戸市震災復興緊急整備条例」可決。3年の期限付きで、「震災復興促進地域」「重点復興地域」指定。  
\*「神戸市株式会社」方式は、長い歴史的経緯と神戸都市問題研究所のようなテクノクラート集団の強力な支援のもとで形作られてきた。

神戸市立中央市民病院がまったく機能しなかった。ポートアイランドに移されたから。採算性確保のため。兵庫県警本部港島庁舎も同じ。対策本部は生田署内に置かざるを得なかった。(U)

\*義援金の問題：

地震から1か月で800億円。

だいたい個人が出している。被災した人の生活は全部この義援金で賄うしかない。国は一切お金を使っていない。なぜなら私有財産は国の責任権限外で、私有財産は自分で守るのが資本主義、と。国がやるのは、道路とか港湾とかの社会的基盤整備。私権は制限するのに。更に問題なのは義援金も基金としてプールして、本来国がやるべき仕事に義援金が回っていつてしまう。国というのは住民救済機関ではなく、土建の機関。(K)

\*日本政府はNGO排除、敵視を続けてきて、リオの地球サミットでも国際的批判浴びた。で、官製NGOが生まれ始めた。いったんは国に全部集中してから配分するという構造体質。

今回は、民間ボランティアのほか、生協の働きが大きかった。神戸は生協発祥の地。(U)

## 2、公共性と知識人

\*JR新長田駅周辺部を副都心にする計画。それは超高層ビルを建てるということ。須磨の住宅街に中央幹線と呼ばれる基幹道路を通す。国道2号線を延長拡幅。南北に須磨-多聞線つくる。

生活大国にはなり得ない方法をとったからこそ経済大国になった。

生産インフラの復興は極めて速い。一般の倒壊、半壊住宅は…。

今回の災害を大きくした構造がそのまま復興の手法になろうとしている。

老朽住宅はそのまま放置してきた。

昔の市電の道（その北端にダイエーが建った。102-3頁）が広くて火が止まった。的確な防災ゾーンがなかった。

その間に薄っぺらな観光ゾーンをつくり、明石大橋、ポートアイランド、六甲アイランド等のイベントを続けてきた。何の防災思想も無かった。裏側の人間の生活を考えてなかった。で、いきなり防災都市といわれても。(U)

\*今回内航海運業界に認められている船腹調整が問題だといわれたが言いがかりに過ぎない。

現在唱えられている規制緩和論は建築基準法をもっと緩めろとか、企業の完全自由化要求運動である（もともとは、系列の閉鎖性が問題になったのだが。125頁）。公共とは何か、日本の企業や行政は分かってない。

特別養護老人ホームの人口当たり定員率は全国で下から3番目、沖縄の3分の1。デイケアの利用率も低い。福祉専門職が少ない。

市営の牧場やゴルフ場。地価が上がると売りかえていく。バブル経済のモデルでもあった。(U)

## 3、復興と公共性

\*ケミカル・シューズ産業が神戸で生き残ってこれたのは、安い労働力と港に近いという立地条件。地場産業の復活は困難。

\*建ぺい率を上げたり、容積率上げたり、パートタイマーを増やすとか、その場その場のもうけ主義の積み重ねが、いったん打撃が来ると全部瓦解する日

本をつくった。今の日本では、他人のことに対する想像力はものすごく弱くなっている。

戦後、西ドイツでは、勤労者の財産形成のために、1950年代、住宅貯蓄割増金法というのを成立させている。国が割増金つけたり、税金免除。その代わり、1戸建てなら100年、集合住宅なら200年もつようなものでないといけない。マイホームでありながらそれを社会的住宅と呼んだ。こういう社会政策の視点が日本にはほとんどなかった。(U)

\*交通鎮静化を考えた都市づくり：

「迂回型システム」で、目の前の地点に行こうとすれば公共のバスとか地下鉄が一番便利で、自動車に固執すると一番不便だという状況つくればいい。放っておけば、人口爆発と同じ交通爆発が起こる。ドイツのブレーメン、ミュンヘン、スウェーデンのイエーテボリとかストックホルム等。

「ボンネルフ」(人々が憩う場、日常的な生活の庭という意味)：オランダのデルフト市では、街路を含む住宅地とかをみんな生活の庭と考え、庭にふさわしい範囲でのみ自動車利用を認める。車道と歩道の分離をしない。そうすると自動車専用道路網を張りめぐらすことになり、車優先、交通爆発の引き金になる。

「パーク・アンド・ライド・ポイント」：ドイツのフライブルクが有名。アウトバーンから出てすぐのところにほとんど無料の駐車場。車で都市内部に行くと駐車場も少なく、駐車料金も高くなる。車にかわって誰でも乗りやすい路面電車。それから自転車の利用。環境共生型コミュニティ。公共とは何かについてのすごいグランドデザインがある。

神戸でやろうとしているのは車のための道路をつくるのを復興と。

公共性よりもマイカー優先。路面電車消滅。国鉄民営化。ロサンゼルスより半世紀ほど遅れて。(U)

4、震災以後の日本

\*量的拡大が行きづまった時に震災が襲った。

新興工業国でも市民社会が力を持つようになると、急速に社会的コストを内部化せざるを得なくなる。その時に競争力が急速に衰える。(U)

\*神戸市議会は総与党化。同じことがこれから国全体で起こる心配がある。住民サイドに立つ人がいなくなった。(U)

\*新幹線と高速道路が倒壊。シンボルが崩れる時は体制自体の危機である。不安感の広がり。(U)

解説：岩見良太郎

\*私たちににとって大切なのは施設ではなく、場所である。多様な場所への欲求を理解せず、いくつかの単純な機能に還元し、その効率的実現のための都市建設を目指してきた。施設の豊かさ。立派な施設ほど優れているという信仰。その結果航空母艦のような、極度に場所性を奪われた都市に住まねばならなくなる。豊かな場所づくりを心がけた方が、防災上もはるかに優れているのではない。

\*場所の創造を支える「場」づくり。地域のさまざまな自主的・共同的ネットワークの形成。それによって初めて公共的な場所への意欲も育まれ、まちづくりへと向かわせる。神戸市長田区真野地区。

このメモを作成していて、たくさんのことを考えさせられたが、さまざまな問題の根にあるのは、「公共性」とは何か、ということだと思う。それは、子どもの問題でもそうだった。今大きな問題というたいてい、「公」と「私」の領域分担をどうすべきかという問題に連なるのである。

この問題を、天災と個人補償の問題を中心に、もうちょっと考えてみた。

阿部泰隆「政策法務からの提言ーやわらか頭の法戦略」(日本評論社・1993年) メモの一部  
第7章 2 天災(特に雲仙災害)と個人補償の要約

\*天災があった時、国は当座の援助はするが、天災の犠牲者に個人の財産補償をする公共性はないという前提で、個人にはビター文も出さないと割り切る。その結果、いち早く復興するのは公共物。公共物に使う大量の金をなぜ被災住民の住宅や農地の復旧と一体化できないのか、金額はしれているではないか、



という声上がる。

＊財団法人雲仙岳災害対策基金や阪神の震災復興基金がある程度この間のすき間を埋める役割を果たしている。

＊しかし、個人補償制度は理論的にも難しいのである。初めから財産を有しない者との間の均衡等考えねばならない。

＊被災者が気の毒で個人補償するというなら、どんな災害でも（雷で家1軒焼かれても）同じだけの補償をすべきである。少数なら無視というのでは少数者無視の不合理なシステムである。

＊「公共性」の名目が自動的に立つ道路や橋の場合、その利用者が少数のところでは無駄と思われる使い方もある。雲仙のスーパー砂防ダム造るプラン等。

＊1人で転居するなら何の援助も受けられないが、地方公共団体が行う集団移転事業なら国庫補助を受けられる。しかし、10戸以上、移転対象地域から全戸移転すること、という要件は疑問。

＊急傾斜地災害法による都道府県が行うがけ崩れ防止工事も、公共性があるか疑問だし、10戸以上という要件も少数者差別である。そもそも、高さ10メートル、傾斜30度以上の急傾斜地など最初から住宅建設禁止にすべきである。日本では一般に土木工事が中心。土地利用規制が足りない。

＊弔慰金、義援金、災害復興基金などは「困っている順」に配分すべきだが、現実には必ずしもそうっていない。数が多く声が大きければ助かり、本当に困っていても少数だと無視されかねない。制度も、命、体の救済を中途半端にして、財産の救済に傾いている。

阿部氏の著作を利用する気になったのは、「公共性」というのは単純な数の問題ではないのだ、ということが主張されている点に魅力を感じたからである。日本の政治や行政は問題が大きくなないと対策を取ろうとしないのが普通であり、その結果少数犠牲者が無視される。これは民主政治の弊害といえはそれまでだが、必ずしもそれだけではない。日本の行政には、最初から「少数犠牲者」が出ることを

予想させるような何かがあると思う。

ところで、95年になってから神戸の地震のほかにも、大きな事件が次々に起こった。うつ状態だった3月20日の地下鉄サリンの事件の時はちょうど東京にいた。それからちょっとしてオウム真理教に対する捜査が始まった時は意味がよく分からなかった。ずっと微罪での逮捕が続いて、どうするつもりなのかと思っていた。4月9日に、東京都知事に青島幸男氏が、大坂府知事に横山ノック氏が当選したのにもびっくりした。特に青島氏は、本当に何の運動もしないで当選したのである。円が80円台になったのにもびっくりした。

このオウム真理教の問題では、我々日本の社会に宗教性がないということが一番感じた。これにつける。オウム真理教の場合、見た目にもこれを感じる。建物は事務所のようであり、神域に工場群が林立している。神像は発泡スチロール製で、工場の目隠しに使われていたそうだ（山崎正和「神殿と祭典のない宗教、オウム」朝日95・5・19）。信者の多くがかぶっているPSIというヘッドギアのような装置は電流が流れ、麻原代表の脳波と同調する仕組みになっているという説明だそうだ（「ゆがんだ鏡2 オウム真理教と今」朝日95・5・9）。

オウム真理教が伸びてきた社会的背景は明瞭である。管理社会化が進む中で、自然とも切れ、血縁・地縁社会も崩壊してきた。「よりどころ」がなくなっている。

こういう状況の中で「新・新宗教」というものが勃興してきた（島田裕巳・梅棹忠夫対談「脱宗教時代の新・新宗教」（月刊みんぱく89年8月号）参照）。入信の理由は、生きがいだとか個人レベルの問題。取りつかれた霊をいかにコントロールするかとか「オカルト的、呪術的で、マジカルなもの」を中心とする。値段が決まっている。全財産が取られるとかは今の宗教にはないと思いますと島田氏はいっている。それからするとオウムは宗教を越えちゃったんでしょう。「生きているあいだだけの宗教」だということも言われる。一代かぎりの信仰である。「死というものが、かなりとおいものになってい



る。」死と直接であう機会が本当に少ない。例えばイスラームにおける神の絶対性、超越性と対比すると、新・新宗教というのはいかにも現世的である。それで、講義で、「心理学のカウンセリングみたいなものでしょうね」といった。講義後、河合隼雄「カウンセリングを語る（下）」（創元社・1985年）の中の「カウンセリングと宗教」という文章を再読した。メモを以下に掲げる。

河合隼雄「カウンセリングを語る（下）」 メモ  
Ⅴ カウンセリングと宗教

\*初めから宗教的な問題を持ってくる人は少ない。例えば嫁と姑とか、そういうことで来る。今は姑の方が泣いてくることが多い。河合氏は、「牛に引かれて善光寺参り」（＝逃げる牛を捕まえようとして追いかけて追いかけているうちに牛が善光寺に入っ、お陰で宗教的体験をした）といって、嫁さんとの問題はそんなに簡単に片づく訳ないから、悪口いってるうちに知らん間に善光寺に行くんじゃないかと。

普通の人が嫁姑の問題とか、三角関係とか、親子間の暴力問題とかで考えることをカウンセラーは別のところから見る。だいたいは善光寺参りはしんどくて別の道を行きたがるが、この道を行きなさい、一緒に行きますから、というのがカウンセラーの役割。ただしひとつの宗教を絶対にこれだということはない。

\*宗教というのはあんまり理屈で説明できないものが多い。「なぜぶどう酒がキリストの血になり得るのか」「なぜ南無阿弥陀仏なのか」とか。そもそもなぜ生まれてきたのかとか。科学が悪いんじゃない、別の説明がほしい。宗教ってのはそういうわけのわからんところがありながらそれに賭けますってこと。そもそも宗教はいっぱいある。どれが本物といわれても困るんじゃないか。カウンセラーはどれが本物とかにせものとかいわない。ただしどう考えてもついていきにくいのは「ついて行けません」という。

\*「あれさえなかったら私はうまいこといっていたのに」そういうことが日常生活の中にボンと入って

くる。日常の世界とは違う世界、つまり宗教的な世界。教祖はみんな宗教的回心の体験をもっている。極楽を見た。カウンセリング受けに来る人は悪という入口から宗教に入る人が多い。パウロいわく、「なぜ自分の欲している善は行わずに、欲していない悪を行うんだらう」

\*家庭内暴力の子で名言吐いた子がいる。父親が「何が不足や」といったのに対して、「うちに宗教があるか」つまり、「金で買えないものをくれたか」つまり人間というものは日常的に全部満足してもだめである。それが豊かになって分かってきた。本でも車でも、買う方が子供と正面からぶつかるよりは楽。子供が分かっているのは「何かがおかしい」ということと親を鍛えねばならないということ。家庭禅みたい。親が信仰に入れば子もよくなるというわけでもない。信仰が隠れ簀になることもある。

\*日常生活がうまいこといっているけど、そうじゃないものがあるんだということで畏れを感じる。この畏敬の念が宗教体験の根本にある。飛行機が落ちて何百人死んだとか、普段あまりに畏れなしで生きてるから固めて出てくる感じ。そもそも生きてることが本当は畏れおののくこと。何で生きてるのか、しかも今の時代に。植物ひとつ見ても、動物ひとつ見ても本当に畏れの感情がわくことがある。普段そういうの忘れてる。それにフッと取りつかれた人がカウンセリング受けに来る。なぜ眠れないのかとか。リズムというのは壊れ出すとむちゃくちゃになる。

\*子どもは怖いお話が大好き。畏れの感情はすごく大切。その経験がないと、大きくなって何かフッと恐いことがあるとガクンとまいってしまう。

怖い話をしてといわれる人は子供から信頼受けている。やってる本人もこわがってたら絶対に子供はついてこない。そしてやってる人を嫌いだったら子供はそんなこといわない。畏れの根本には死に対する畏れがある。死んでいく人（ガンとか）のカウンセリングは非常に難しい。

「同行二人」（どうぎょうふたり）。一人で行くと思うから恐いのであって、いつも観音さんがつい

てくれるんだと思ったら恐くない。カウンセラーがクライアントを治すんじゃない。必ず観音様がついてきているという、そういう体験をするのが治るということ。カウンセラーというのはそういう体験に至る仕事をクライアントと一緒にする。

#### 4

次に、社会教育研究全国集会（山形市、蔵王温泉）に出席したときの日記から作成した文章を以下に掲げる。

社会教育研究全国集会（山形蔵王温泉・1995年8月）

26日（土曜日）、6時過ぎに小平の家を出る。国分寺で、7時28分東京発のつばさの指定席が買えた。間に合うのかと心配したが、三鷹で中央特快がきて、十分余裕があった。上野も止まらず、福島までまっすぐ行って、あと終点山形に9時55分に着いた。改札を出たところにある観光案内所で地図をもらい、表口に立ってみたが、レンタカー屋は見あたらない。裏口かと思い、そっちに行ってみたが、ない。さがしながら歩いていくことにした。地図に城が出ていて、そこに郷土館が出ていたので、まずそこまで歩いた。入館料200円。予想に反してここは明治時代に建てられた病院で、展示によれば1880年にローレツという医者がオーストリアから来て、山形の医学の進展に貢献したそうである。2年間しかいなかったそうだが、影響が大きかったのかいろんな資料が展示してある。一般的な郷土資料は少ない。それからさらに歩いて11時に県民会館に着いた。途中、あちこちに駐車場があった。土地が足りないということか。県民会館にはもうかなりの人が来ていた。しばらく待つと受付が始まった。ホテルは手配してもらえた。11時半に手続きを終え、そば屋を探しながら駅のほうに戻った。レンタカー屋は出てこない。ラーメン屋が先に見つかったのでそちらにした。1時から全体会。型通りの挨拶のあと、影法師というグループのコンサートがあった。そのあとの課題別セミナーは、特にこれという

のはなかったが、「地域づくりと協同組合の学習・文化活動」というのに出た。5時に終わって、チャーターしたバスで蔵王に向かった。ターミナルに着くと、私の泊まるホテル樹林の迎えのバスが待っていた。割り当てられた部屋は、最終的には5人が一緒になった。親しくなったのは、五日市青年の家主事北見靖直氏と、岡山県後月郡芳井町吉井でごんばう村農産というのをやっている善積道信氏である。いずれも立正大学卒業だそうだ。温泉に入り、夕食をすましてから、交流会に出た。ちょっと会場が狭すぎて、すごい混雑だった。雑音がひどくてまともに聞き取れない。小林文人氏にだけはとにかく挨拶をして、早めにホテルに引き上げた。そして、もう一度温泉につかって、真っ先に寝た。

27日（日曜日）、8時前に起きて温泉につかり、朝食をすませる。分科会は「地域づくりをめざす社会教育実践の展望—くらしを守り、人々の連帯と育ち合いをめざす—」というのに出た。場所は泊まっている樹林で、そのこともこの分科会に決めた理由の1つである。出席してみると、今年から社会教育推進全国協議会委員長をやっておられる島田修一氏がおられた。最初にこの分科会のこれまでの活動経緯が説明されたが、その関係の資料集によると、実に1987年から始まっているのである、この分科会は。まっ、伝統ある分科会なんでしょう。隣の「あすをひらく女性の学習・活動・政策」がほとんど女性ばかりなのと比較するといかにも男が多い。福長笑子氏がおられた。レポートは福島県飯館村という農村でやった「若妻の翼」という村の嫁さんをヨーロッパに海外研修派遣する事業についてである。一応飯館村公民館長によってレポートが1時間足らずでなされて、それから参加者の自己紹介のあと討議が11時から始まった。私は、「若妻の翼」はあくまで話題提供程度で、討議はそれとは別個に勤められるのではと思ったらそうではなくて、このレポートについて延々と4時頃まで論議されたのである。最初、何が問題なのかわからなかった。別に問題ないんじゃないか。ところが、この事業は、公民館関係者にはびっくりするような事業らしい。まあ、こ

んなことやっていいのという含みもなくはないように。途中、弁当はホテルの部屋に戻って1人で食べた。また午後、耳が疲れると部屋に戻って休んだ。全然戻らなかった皆さんは大変タフだ。4時頃、公民館長は引き上げ、まとめの討議をして5時に終わった。これまでつかっていた温泉が故障して、しかしもう1つのは温泉というより普通の風呂の感じなので、いったんつかったあと、下駄履きで出て、共同湯につかりに行った。ここの湯はしょっぱい。坂が急で、そして樹林は一番上の方にあるので、帰りはきつかった。夕食後、北見氏、善積氏と9時頃まで部屋で話し、そのあと、私は寝た。

28日(月曜日)、6時過ぎに起きて風呂につかる。9時前に全体会の場に行く。入り口で本を買った。9時に全体会は始まったが、疲れたので引き上げることにした。バスターミナルに向かう。途中、分科会で一緒だった地元の女性から挨拶された。9時40分のバスに乗った。駅のそばにレンタカー屋があるのがわかった。運だな。レンタカーを借りる必要は全くなかった。ただ、車だったら、民宿がたくさんあるのでそのどこかに空室があれば泊まっていたのではないかと思う。11時17分発のつばさで東京に戻った。

## 5

次に、宮古に行って、老人と子どもたちについて調べた、というか、きいたときのメモの一部を2つ、以下に掲げる。

### 宮古シンポジウム(1995年9月)

22日(金曜日)6時半に起きる。沖縄タイムスを読んでいたら、23、24日に宮古でシンポジウムがあるそう。平良勝保さんが書いている。行ければ行きたいが、台風が接近している。スリランカに行きたいと思っている。セットできるかどうか、まだわからない。

23日(土曜日)、6時に起きる。飛行機は飛ぶそうなので、準備して、6時半に出る。空港でチェックインして待合室で待っていると、天候不良の表

示が出たが、結局定刻(7時35分)よりちょっと遅れただけで出発した。8時半に宮古に着いたが、仲宗根均さんはいなかった。小雨が降っていたので、タクシーで平良第一小学校のところまで行って(500円。なお、初乗りは380円)、仲宗根さん宅に行こうとしたが、なぜか見つからないのである。あとでわかったところでは、降りたところが仲宗根さん宅から2〜3軒すぎた場所で、その先の方へ捜し始めてしまったのである。目印の八百屋は、シャッターをおろしていて、それと気づかなかった。先へ先へと捜すうち、知っている古本屋に出たが、そのどっち側だったかもはっきり思い出せなくて、時折雨が強く降るし、時刻はもう9時20分になって、もしかしたらシンポジウムは10時から始まるかもしれないと思って、タクシーでまず平良市中央公民館に行った。車がほとんど見あたらなかったが、公民館はあいていて、職員の人がいたので、きいてみると、シンポジウムは午後1時からということだった。それで、仲宗根さん宅に電話すると、仲宗根さんが公民館まで迎えに来てくれた。仲宗根さんは、まず、彼の職場に連れていってくれた。彼は今老人保健係長である。本庁舎ではなく一階建ての独立した建物の中である。そこで、今彼が手がけている仕事について矢継ぎ早に説明を受けた。1つは、96年2月に開催予定の福祉祭についてである。10周年記念ということで、何か理念を打ち出したいと。行政各部署の寄せ集めではなく、業者やNTTにも入ってもらいたい。仲宗根さんの意見では、沖縄本島と比べ、宮古は情報のネットワークが悪いと。それぞれバラバラにやっていると。そういった状況を変えていく理念がほしいと。もう1つは今年12月から、コンピュータによる在宅ネットワークを作る予定だそうである。本土の方で実施している例があり、その場合、コンピュータ300台を行政と接続し、血圧などの情報を送ってもらい、問題があれば対処するというシステムである。ハードのほうは100%補助だが、その後のソフト面が大変なためそんなに利用されていないそう。これを導入する前にシンポジウムを開くそうで、それをど

うするかということ。最後に、10月からの各ポイントでの検診予定表を見せられて、近くまで行政の方から出かけていかないと応じてくれないので大変だということだった。こういう話をきいて、これはちょうど調べていたコミュニケーションの問題ではないかと思った。で、そういう観点から福祉の位置づけについてちょっと話してみた。それから、車でまず、新しい橋を渡って来間島に行った。牧場、小さなビーチ等を見てから、橋の近くの展望台みたいな建物に行った。島は思っていたよりずっと小さい。それから宮古本島に戻って、前浜に行った。台風14号でビーチが削られて大変だ。前も削られて、それは補修したんだそうである。橋ができたことが影響しているのか、あるいはビーチに建造物をこしらえたことが影響しているのか、ともかく以前はなかったことなので、つまり人災なんでしょう。平良の方に戻ると、ちょうどトマリンみたいなものを建設中だった。フェリーが将来ここから出るのだそうである。ホテルが付属していて、結構大きい。それからそばを食べた。食べていたら仲宗根さんの知り合いが3名入ってきた。商工会議所の人で、離島フェアーの担当だということだった。1時に中央公民館に行った。公民館職員が、人が集まるだろうかと心配し、仲宗根さんは、宮古ではシンポジウムというのは無理だといっていたが、人数は結構集まった。6~70名はいたと思う。あとで、たぶん宮古文化協会の動員だろうという話もきいたが、2つ挨拶があったあと、仲宗根将二氏が基調報告をした。相当長かった。戦後「文化立島」でいこうということで出発したのに、今や地域も、環境も変わって解体の危機に瀕していると。だから、出発の頃のことを思い起こそうと。だいたい配られたレジュメに沿っての話だったが、その中で、いろんなイベントが目白押しだが、「事業主体はハード、ソフトともにほとんど同じでありながら整合性はさほどみられず、まるで別の機関のように股裂き状況をみせている」とあるのはおもしろい。もとに戻れるような状況ではないと思うんだがねえ。10分休んで、2時半から歴史・考古分野の発表で、まず琉大助教授の豊見山

和行氏が「宮古・島社会への歴史的視点」という題で発表した。島の多様性を捉えるための比較の視座が必要だということで、アルカイヤーAlkireによる、アイソレイツ、クラスター、コンプレックスという分類が紹介されたが、それだけで何かの結論を出すのはちょっと無理な感じがした。この分野のサブ報告者は、平良勝保さんだった。この分野の報告が終わって、平良さんに挨拶してから、仲宗根さんと会場から出た。あと、民俗、文学、音楽・芸能という順になっていたが、それより池間島におもしろい人がいるから、その人に会いに行かないかと仲宗根さんから誘われたのである。池間島に着いてまずガソリンスタンドによって、それからいったのが、伊良波彌(ひろし)氏の家である。お父さんと、弟さんと3人でいた。ちょっと上がってから、ガソリンスタンドに行って、そこでビール等を飲みながら話した。ガソリンスタンド内は雑貨屋さんにもなっている。奥にソファが置いてあり、そこで話した。伊良波氏は名刺によれば、池間島観光ガイドブック(幻の大陸・八重干瀬マップ付き)編集をしているのである。自宅ではワープロがついていて、机のまわりに本や書類が散らばっていた。何でも池間島ハーリーが昨年で100周年を迎えたんだそうで、その関係の記念誌づくりをしているんだそうである。今晚7時からその編集会議とか。で、彼は地域のためにということをするさくいうのである。その場合、地域というのは池間島のことなのである。何でそんなに熱心なの、ときいてみると、地域に恩返ししたいんだそうだ。ひゃーっ、すごいんだね。そんなにもいい島なのかねえ。彼にお土産として沖大広報を上げたが、この号のサザンクロス欄に、例の「与える木」のことを書いたわけである。地域というのが仮に母親みたいなものなら、どんどんとっていいんじゃないか。母親ってそういうものではないのか。私が述べたのは、池間島に来るまでに仲宗根さんに話したことだが、地域が主語ではいけない、ということである。そうじゃなくて、地域というのは我々みんなで創っていく。我々てのは島の人でなくっていいんじゃないか。実際、移民の多い島だと、外部と

の関係というのはむしろより重要になる可能性がある。だから、例えば子どもの教育にしても、離島だからこそいっそう他地域との交流技術、体験は重要だろう。そういうふうであってこそ、地域も活性化できる。島には自然があり、夏休みの間だけでも子どもたちはすごく変わると伊良波さんは言うが、じゃ、子どもたちはずっと島で育った方が幸せなのだろうか。ちょっと違うんじゃないか。そういうふうにと考えると、必要なのは「地域」というよりは「コミュニケーション」ではないか。だいたいそういうことを私の考えとして述べた。あとからガソリンスタンドの店主の仲間章郎氏もちょっと話しに加わった。彼も伊良波さんたちと一緒に地域のためにいろいろやってるようである。7時前に出て、平良に戻った。トンカツ屋で定食を食べて、仲宗根さん宅に行った。2階に上がって、シャワーを浴びてから、また車で出て、上野村のドイツ村にできた、ホテルブリーズベイマリーナにいて、コーヒーを飲みながら話した。このホテルはオリックスがキャンプ中泊まっていたんだそうである。本土資本だそうだ。お客も本土からだろう。ボーイさんも本土の感じだった。そういうことから組織の問題を話した。11時半までいてから仲宗根さん宅に戻った。すぐに寝た。

24日(日曜日)、8時10分前に目がさめた。朝食後出て、まず港の周辺を走る。伊良部からは最短距離になるあたり。あっちこっちで工事している。10時に公民館に行く。最初は言語分野で、報告者は琉大教授の名嘉真三成氏。サブ報告者は大平養護学校教諭の島尻澤一氏。どちらの発表も長く、司会者が何度時間の注意をしても全然影響しないようだった。次は社会・経済分野で報告者は冲国大教授の来間泰男氏。データ中心で非常によくまとめられていた。そんなに楽観的な結論が出せるはずないじゃないかということが納得できるデータである。サブ報告者は長濱幸男氏。この方は平良市の企画室長で、トライアスロン導入当時の担当だそうである。たまたま地域活性化と取り組んでいるところにトライアスロン話が持ち込まれたから成功したのだというこ

とだった。この発表も長かった。で、次の環境分野の発表は午後ということになって、昼休みになってしまった。各発表の持ち時間が配られたレジュメには書かれていない。すごいなあ。これこそ宮古ではないか。仲宗根さんと相談して、我々はシンポジウムはもう切り上げることにした。だいたいどういいう人がいて、午後の共同テーマ討議がどうなるかもおよそ見当がついたから。で、仲宗根さんは車を東平安名岬に向かって走らせた。途中で弁当を買う。だんだんコミュニケーションという概念が仲宗根さんに浸透し始めているようで、つまり、老人問題というのもコミュニケーションの問題なんだよ、と。老人だって生きている人間なのである。人形じゃない。親切にすればいいってもんじゃないよ、と。東平安名岬に着いてみると、ここにも仲宗根さんの知り合いの課長さんの家族がいて食事中だった。肉を分けてくれた。食後グランドゴルフをやっていた。台風が通り過ぎたあとのせいか、空気が澄んでいて、宮古でこんなにきれいな海を見たのははじめてだ。南岸沿いに戻ってきて、海岸際の小山に登って、頂上の東屋で昼寝した。屋根に牛の彫刻がある。城辺町がつくったものだそうだ。ステーキの広告みたいである。起きてから、今度は上野村の宮古パラダイスという、蝶々のいる植物園に連れていってくれた。料金(5000円)を払ってみるところはそんなに大きくない。蝶と、ラン、ハーブなど。その奥が大きな植物園になっていて、ここだけなら無料である。で、ここがすばらしいのである。果樹が植えてある。特にグアバ(バンジロウ)がたくさんあって、食べながら進んだ。食べていいと仲宗根さんはいうのである。さらにお土産にとビニール袋に拾って集めてくれた。アダンもあった。ここでは防潮林として使われているそうで、実は仲宗根さんは食べたことがないそうだ。ここに農林省の看板があり、「山村振興等農林漁業特別対策事業(交流推進施設整備事業)広場、緑地等利用施設」と記されていた。そのあと、そばの野原地区にある小山の展望台に登って景色を見た。見た感じは南大東と結構似ている。このそばが自衛隊基地である。このあとまっすぐ空港へ行く。



まだ5時過ぎだったので6時前まで2階の喫茶店に座っていた。シンポジウムに出席していた人々も徐々に来たが、皆さんそろってANKのようである。私はトランスオーシャンでチェックインして、それから平良さんがいたので、3人でちょっと話した。平良さんの話をきくと、共同討論はうまい具合にまとまらなかったようである。そうだろうなあ。こういう島で夢を持つってのは大変だ。7時過ぎに那覇に着いた。

なお、24日の沖縄タイムスに宮古関係のニュースがたくさん載っていて、いずれも今回の訪問と関係している。

- ①シンポジウムの記事。私も写っている。
- ②台風14号のため前浜の砂が浸食された。
- ③武村蔵相が、23日午後宮古訪問。
- ④離島フェア関係の記事。
- ⑤平良港湾整備事業に伴う漁業補償金を承認した伊良部町漁協決議無効確認訴訟関係。

#### 宮古の地域児童文庫

95年9月29日（金曜日）の夜、飛龍3で那覇を発ち、30日（土曜日）午前11時前に平良に着いた。

ちょうど1週間前の23日（土曜日）にも平良に来了。また来ることになったのは、26日（火曜日）に友人の小倉浩之さんが来て宮古に行くことになったが、一緒に行くことにしたのである。それは船だからということもあったが、テーマが見つかったことが大きい。そのテーマというのは「宮古の子どもたちに未来はあるか」というものである。このテーマで、何かきけるところがないかと妻にきいてみると、それなら地域児童文庫がいいといい、出発前に「沖縄の子どもと親の健全育成事業」という沖縄地域児童文庫連絡協議会の第1年次報告書（1993年5月）を手渡してくれた。この72頁に平良の地域児童文庫が3つ載っている。その他に妻は、平良市立図書館長の東風平さんという女性を紹介してく

れて、かつ、この方へのお土産も買ってきてくれたのである。

船は、出発が遅れた結果、予定より2時間以上遅れて着いた。船の中で一緒になった大阪から来た青年と3人でタクシーに乗ってレンタサイクル屋に行った。その手前が平良市立図書館だった。そこで、お土産が傷まないうちに早く渡してしまうことにした。

館長の東風平さんは妻とは友達だそうで、来意を告げ、地域文庫一覧を見せると、全く迷いを見せずに即座に風の子文庫がいいと言い、代表者の前泊博美さんに電話してくれた。今すぐでいいという。場所が東仲宗根なのでちょっと距離がある。車で来てくれることになった。待っている間、図書館内を見た。人は少ない。土曜日の午前中でこんなもんか。子どもの本を置いた部屋は誰もいない。

やってきた前泊さんは大きな帽子をかぶって、農家のおばさんといった感じだった。館長が話をきく部屋を用意してくれたが、私としては現場を見てからの方がいいと思ったので、そういったら、では連れて行って上げましょうと。ワゴンに乗せてもらって行く。

風の子文庫はアパートに隣接した平屋建ての建物である。机に向かって10名ぐらいいは座れるだろうが、本は少ない。お話し部屋みたいな感じ。実際、ここに親子でやってきて話し合うんだそうだ。アパートの1階は、半分が中学生の塾、半分が学童保育（前者は前泊塾、後者はおやこぼし学園という）。20年前に塾から始めたが、見ておれない、放っておけないということで学童保育や地域文庫もやるようになった。今の場所に移ったのは5年ほど前で、それまでは平良市のもっと中心部にいたんだそうである。

話し始めてすぐに、前泊さんは池間島の出身だとわかった。94年4月に池間島に行ったとき、昔の話をよく知っている人として前泊徳正さんという人のことをきいた。池間の地域文化振興の中心的な役割を担ってきた方のようなのだが、残念ながら入院中で会えなかった（拙稿「南大東と宮古の旅」（沖縄大



学地域研究所所報9号所収)を参照)。この徳正さんの息子さんが、博美さんの夫になる。夫は、平良市役所の公務員だそうだ。今池間島全島公園化計画がある。これについてちょっときいてみたら、放置すればホテルなど民間企業の買い占めがどんどん進むので、それよりは公園化したほうがベターではないかと考えているそうだ。全体としては公園化に賛成の意見のほうがちよっと多いのではないかということだった。

宮古全体についての状況を見ると、平良市は一応トントンだが、周辺の自治体は人口が減って、過疎化、高齢化が進んでいる。宮古の場合、家庭が安定してなくて、これも問題である。先生とか公務員とかを除くと、1人あたりの稼ぎがせいぜい12〜3万円というのが普通で、そうするとどうしても共稼ぎしないとやっていけない。最近平良にも次々に大型店舗ができていく。もう5つぐらいもあるようだ。そういうところが主婦の働き場所になるほか、夜の仕事ももちろんある、と。農業のほうは、サトウキビのほか葉煙草が多いそうだ。とにかく、稼ぎが少ないために生活が安定せず、それが子どもの問題を引き起こすことになる。このような中で行政に長期ビジョンがないのが一番問題である、と前泊さんは強い調子で言う。「道路を見てご覧なさい」と。実際つぎはぎだらけの部分が目立つ。はっきり言って無能だとさえ言う。子どもとの関係では、今平良には児童館が1つしかなく、一応専従の方が2名いるそうだが、悪い意味で公務員的で、問題解決に全然貢献していないと。

どんな形で問題が出ますか、ときいていく。早いと、幼稚園ぐらいでもう、将来問題になるだろうと思われるような子もいるそうだ。例えば、友達のせいにするとか、具体的な現れ方を聞き始めたあたりから、小さな子どもたちが3〜4人やってくる。ねえねえ、と早く相手になってほしいようだ。ちょうど12時すぎたので出直すことにする。

この日の話の中で特に記憶に残ったのは、博美さんが何度も、子どもたちは行き場がないんですよと言ったことだ。

翌日の10月1日(日曜日)午後2時から再び同じ場所で話をきいた。行き場がないというのはどういうことですかということから始めた。宮古の場合、自然とかはいっぱいある。そういう意味では恵まれている。行き場がないというのはそういう意味ではなく、学校から帰ってもお母さんがいない、代わりにみてる人もいない、ということだそうだ。だから児童館が本当にほしいと。図書館もほしい。でもそれでは母代わりとして限界があるでしょうというと、そうすればお母さんたちも来るようになるんですと。なるほど、つまり母親の現状にも批判があるわけだ。風の子女庫は今は補助金なしでやっているそうだ。ほかに、団地の集会所などで似たような活動をしているところがあるそうだが、とにかく、行政がちゃんとしてくれないから自分たちでやるしかなかったんですと。

子どもたちに接していてどうですかときいてみる。今の子どもたちって夢がないという。こうしたってのがない。「僕は大きくなったら〜したい」ってものがない。探求心、好奇心が貧しいということだろう。しかし、テレビはあるし、知識はたくさん持っている。ちょっと意外だ。もうちょっと宮古の子どもたちのいい面について話されるのではないかと予想していたのだが。言われるような特徴は全国的に認められる傾向だろう。

話をきいていて、子どもよりは母親を含め大人のあり方に批判的だと感じた。例えば、子どもは自然に育つものといっても、母親とのスキンシップ、母親がいることから生まれる安心感みたいなものがないと子どもたちは本を読む習慣を身につけない。育てる努力がいる。それがなければテレビに流れてしまう。じゃ、問題というなら、そういう母親にあるんじゃないかと。実際、母親がこのような問題に関心だと言われる。割合最近のことのようだが、上野村のドイツ村にドイツ人が来た際、ドイツの教育について経験に即して話してもらう講演会を企画し、大いに宣伝もし、反応もいよいように思われたのに、12〜3名しか集まってもらえなかったとか。まあこれは声のかけ方にもよるだろう。

前泊さんに、じゃあ夢はあるんですかときいてみると、子どもも老人も一緒に住んでいる地域で生活することだそう。子どもと老人とは時間のリズムが似ているとかで、子どもたちは「待つ」ことができるようになり、思いやりの心が育つと。しかしそうすると、現在の風の子文庫の所在地は平良の新興住宅地で、若い夫婦が中心である。たぶんこんなところに年寄りと一緒に住まないのではないかと思うのだが。前泊さんは、ここはここでそれなりにいいんですと。若い人たちがいるし、中心部よりは庭とかもてるから。一生懸命働いて今の場所を手に入れましたと。これから住宅も増え、発展していきましょうから、児童館も作ってほしいんですと。なるほど。ちょっとこの辺は一貫しないものを感じられる。

風の子文庫みたいなのは中心になる人がいれば活発に動くが、その人が抜ければ消滅するのも速い。前泊さんの場合もその辺が悩みの種のような。まだ継続性の点で十分自信がもてるに至っていないようで、本当、難しいのはお母さんたちと言う。そうだろう。

## 6

レジュメに赤木かん子氏と、とあるのは、「本の探偵」赤木かん子さんが、那覇市立真和志中学校に講演しに見えたが、その翌日の11月5日と6日の2日間、一緒に動いた。5日は日曜日だったが、古本屋に行ったほか、宜野湾図書館にも行った。新しい図書館である。中に入ってみると非常に広くて、ワッスごいという感じだが、どうも配置がよく分からないのである。ぐるぐる歩き回っているうちくたびれて眠くなった。CDをきくコーナーでは何人かがヘッドホンに耳をあててきいていたが、オウム真理教を連想してしまった。借りてみようかなと思ったが、市民と市に通勤・通学の人だけに貸し出すようになっている。これなんかはちょっとカチンとくる。狭苦しい。赤木さんの話では、今文化行政ということで、図書館がどんどん建つようになって、ハードのほうは建築家もプライドがあるからいいのが

できるようになっているが、ソフトのほうが追いつかないということだった。実際そういう感じがした。

翌6日は、私の車で、開館準備中の豊見城中央図書館に赤木さんを連れていった。この豊見城中央図書館がまたばかでかいのである。8万5000冊もの本がここに入るのだそうである。たまげた。96年3月オープン予定だそうだが、行った時点では本を並べ始めた段階の感じだった。そこで作業をしている人々のほか、豊見城の学校図書館、糸満の図書館の方々等も加わって赤木さんの話をきいた。

赤木さんが強調したのは、分類とかもその場に合わないのだめだということだと思う。40年前の分類では時代遅れなのはもちろんだが、分類はあくまでその場、サイズに合わないといけないと。だからコンピュータを使わないで分かるようにするのがいい分類だと言われるのである。本の背は線で、それを100冊なら100冊並べるとそこに主張が出てくるが、そういう「面」をつくるのが図書館の仕事だとか、子どもと大人の本を一緒の場所に置く混配方式とか、技術的にも面白い話が多かった。

しかし、もっと面白く感じたのは、1つは図書館の公共性との関連で、利用者カードには地域と年齢が分かるようにしてくださいと言われたことだ。それは、どこから来ているか知るためではなく、逆に、来ない人がどの地域に多いか知るためである。本が嫌いでも情報はいらないという人はいない。公共図書館はみんなのためのものである。だからみんなが来るようにしないとけないというのである。それから、例えばリクエストした本が届いても取りに来ないということがあるんだそうで、それはつまり、本が読みたいんじゃないじゃなくて、司書と話がしたいんだと。似たことは、図書館友の会にもあるんだそうで、ボランティアは図書館の仕事は知的と勘違いしてくる人が多いんだそうだが、自己実現したい人が多いそうである。思い当たる。図書館は用事がなくても来ていい場所なので、つまりそういう人たちが集まりやすいわけだ。小6までの感性はほんもので、中学生は病気の大人の予備軍です、と赤木さんは言われる。

この話のあと、続けて具志頭に行った。村立社会体育館横の建物で、今度は保育園保母・幼稚園の先生・地域文庫の人たちを相手に赤木さんは話した。こっちは、子ども論により近い内容で、AC（アダルトチルドレン）のことが話された。西山明「アダルト・チルドレン」（三五館・1995年）によれば、親から精神的、身体的虐待を受けて育った人には「世界の中はまやかして成立している」という誠実さを欠いた世界観が与えられ、そのため自分の主張や感情を殺して生きる癖を身につけ、同時に周囲の期待を読みとって、従順すぎるほど「いい子」になることが多いそうで、これをACというんだそうである。「アル中の母を持った子はアル中の女の子を求める」とか。沖縄の子どもたちについては、島でしか生きられない子をつくっても困るでしょうと。同感である。

それから、沖縄だから本がないんじゃない、と。今、地方にはほとんど本は流通しない。全部に流通させようとする、日本の本というのは買い取り制でなく返還制なので、あとでどーんと返本が来てつぶれる。それから在庫があると倉庫代のほかになお税金がかかるので、税金調査の前に裁断してしまうんだそうである。

いただいた冊子にこういったことが詳しく書かれていた。赤木かん子・明定義人「子供と本と図書館と」で、95年6月に東京都足立教育研究所で開かれたジョイント講演会の記録である。

## 7

レジュメの、さまざまな旅行計画とあるのは、外国でのフィールドワークをいくつか計画したが、いずれもつぶれたということである。9月中に、イタリア、キューバ、プエルトリコ、スリランカ、ペルー等の計画を立てた。しかし、いずれも実現しなかった。必ずしも時間がないというのではなく、可能な時間を一杯使って計画を立てるものだからうまくいかなくなるわけで、後になれば、もっと小さい案ならできたのになあと思う。どうもこれは性格な

ので難しい。95年の夏は体調もよくなかった。8月に東京で買ったパソコンの調子が悪くて、結局交換してもらえたが、それまで何度も運んでいるうち腰を傷め、重い荷物が持てなくなった。9月に入ってから耳が化膿した。しかしその後、研究発表との関係でどこかに行きたいということで考えたのが北アイルランドである。ところがこれも時間の関係で実現しなかった。ならばせめて、実際にアイルランドに行った方の話をききたいということで、アイルランド通として有名な米須興文琉球大学教授に研究会で話していただくことを計画したが、これも実現しなかった。しかし、前記の社会教育研究全国集会会場で買った鈴木敏正氏の「平和への地域づくり教育」はとても面白く、最終的にはこれを紹介するだけでもいいということになったものである。そういう次第であるから、北アイルランドにはいずれ行ってみたいと考えている。実際行ってみてからものを言いたいので、本稿では鈴木氏の本から作成したメモにコメントを付するにとどめる。

## 8

まず、研究会で配布したメモを以下に掲げる。

鈴木敏正「平和への地域づくり教育 アルスター・ピープルズ・カレッジの挑戦」  
（筑波書房・1995年）      メモ

### プロローグ

\*1994年8月31日、IRAが無条件、一方的な全面停戦発表。

1969年の市民権運動グループとイギリス軍の衝突に始まる「トラブルズ」は北アイルランドにおけるナショナリストとイギリスないしユニオニストの民族的対立、あるいはプロテスタントとカトリックの宗教的対立として理解されているが、発生後複雑さを増し地域社会の中に「構造化」。死者だけでも3000人以上。

\*1690年の「ボインの戦い」でプロテスタント

のウィリアム3世がカトリックのジェームズ2世に勝利することでイギリスの支配が確立。

1801年、13世紀以来続いてきたダブリンの自治議会廃止、イギリスに併合。

1916年イースター蜂起、1918年から独立戦争、アイルランド自由国が生まれる。北部アルスター県の9郡のうちスコットランドからのプロテスタント入植者（中でもプレスビテリアン）の多かった6郡が一方向的に分離され、英連邦の一員となる北アイルランドが誕生。事実上、イギリス本国と北アイルランドのプロテスタントによる二重支配。

1972年デリー（ロンドンデリー）でイギリス軍が発砲、市民13名が死亡（血の日曜日事件）。\*最近の「北アイルランド問題」を考える際注目すべき点：

（1）紛争のアルスター化。アイルランド対イギリスというよりは、北アイルランドにおけるプロテスタント対カトリックという対立が前面に出る。

（2）コミュニティの分裂。

（3）教会の支配力が増すとともに、青年を中心に「教会離れ」も。

（4）経済構造に影響：支店経済、二重構造、紛争関係予算への依存。

（5）失業問題での差別。

（6）政治的対立の固定化。

\*アルスター・ピーブルズ・カレッジが呼びかけた停戦に関するオープンフォーラム：多様な意見を自由に発表。停戦問題そのものと言うよりは民主主義のあり方が焦点。落ち着いた議論。

さらに、「地域社会関係論」の長期講座にも出席。1年間、毎週火曜日、朝9時半から4時半まで。このほかに、「地域社会発展論」の講座もあり。両コミュニティ対話の場になっている。

カレッジは、1982年に設立された民間の、独立した成人教育・社会教育センター＝自由大学。宿泊施設をもつ。トラブルはじめ、北アイルランドの諸問題解決に正義、平等、民主主義といった理念のもと地域社会教育実践と地域づくり活動を通して貢献しようとする。アルスター大学成人・継続教育

学部（94年9月から、社会科学・健康・教育学部）教授（地域社会教育担当）、同大学地域社会調査開発センター長のトム・ラベット氏。

## 第1章 アルスター・ピーブルズ・カレッジ以前

### \* 4つの地域社会教育モデル

自由主義的モデル：

地域組織モデル：

活動の中心的目的を地域住民個人の個人的成長に置く。日本の生涯学習の行政理念に近似。

地域開発モデル：

貧困地域、権利剥奪地域等に焦点を合わせる。それらの地域の教育的改良を目指して関連組織とグループのネットワーク化。改良主義。

革新的モデル：

地域行動モデル：

地域社会全体を視野に入れる。視点が行政や制度的諸機関から地域住民の側に移っている。地域活動諸グループとその学習活動が注目される。学習内容が外から与えられるのではなく、地域住民自身の対話と討論を通して日常生活課題を学習していく過程が重視される。課題提起型。行政が無能ぶりを示す中で70年代の北アイルランドで広がった。ともすると地域主義に陥る。地域活動そのものと学習活動が不分明になる。

社会行動モデル：

活動基盤を地域に置きながら、地域社会だけでなく社会全体を視野に入れる。

地域問題は社会全体の問題の一環であると理解した上で、学習の内容や動機を特に重視。体系学習。

鈴木氏の疑問

（1）4モデル相互の関連はどうなっているのか。

（2）地域住民の自己教育活動についてのモデルが必要ではないか。自由主義的モデルから革

新的モデルに転換する実践的モデル、「自己意識化」学習が必要ではないか。

- (3) 地域行動モデルと社会行動モデルとのギャップを埋め統一していくものとして地域づくりの学習が求められるはず。
- (4) 地域づくりを進めるなら、生活課題の学習と区別される生産・労働学習を位置づける必要がある。
- (5) 地域行動モデルを基盤に社会行動モデルを展開するにしても学習の内容と方法はきわめて多様であるはずなので構造化が必要なのではないか。
- (6) 権力構造の問題と、自治体・自治体労働者の役割が不明確。

## 第2章 アルスター・ピープルズ・カレッジの構想(79-81年)

ディスカッション・ペイパー(79年)

セクト主義的分断に対して共通の問題、共通の価値観を浮かび上がらせる。

人々の現にあるところから出発。協同的、集団的解決に道を開くような感性、才能、能力の発展を奨励。生活に影響を与える文化的、社会的、経済的、政治的現実理解を奨励する学習過程の促進。

国際諸機関から支持、援助が受けられるだろうこと。

アルスター・ピープルズ・カレッジ協議会(設立準備機関)(79年)

5カ年発展計画(81年)

教育計画(4領域)：

アルスター研究(文化・政治研究)：

共通面、差異面いずれもオープンに考察する。

地域社会研究：地域の問題に積極的に関わっていくような意志形成の教育。

女性研究と労働組合研究：上記2者に比し特殊。

## 第3章 行動的ディレクター —初期カレッジの活動—(82-85年)

82年カレッジの活動開始。

文化・政治研究に偏っている感じ。

85年失業問題国際会議「地域社会教育と失業」(ピープルズ・カレッジ(ダブリン)、ノーザン・カレッジ(ヨークシャー)との共催)

\*雇用拡大への脱中心主義的アプローチの重要性。

\*地域経済の担い手による政策形成・実施に地域社会が参加すること。

\*新しい形態の社会的所有、地域企業、協同組合の経験が「新たな形態」の経済的組織の考察材料を提供。

\*労働市場において不利益をえている人々、社会的に有益な産業あるいはサービスを強調することにおいて積極的差別化を行う。

\*失業の公共性。みんなの問題。

85年、学習パックの創造：北アイルランドの主要な政治的・文化的伝統にとって鍵となる諸契機の検討を行い、それらを教育実践で使用する形にまとめたもの。

特定地域の集中的調査、教育活動。都市再開発に伴う地区教育計画。

## 第4章 「存立の危機」と新モデルの模索(86-89年)

スツールを支える3本の足：地域社会教育の実践者としての活動、大学教員としての活動、地域住民としての活動。86年、ラベットはカレッジの議長、アルスター大学教授、住民組織＝「リゴニール地域社会改善協議会」議長となる。

文化・政治研究(アルスター研究)の展開として、コア・カリキュラムの創造：「地域社会と環境」「地域社会における女性」「労働と失業」「北アイルランドの青年」。これとは別に5つの学習パックの領域を概観し、同時に一般的な問題の補足となるような「文化と地域社会」。

学習パックの最重要部分はオーラル・ヒストリーの手法で集められたもの。



87年、オーラルヒストリーの手法を用いた「北アイルランド社会における労働者社会」出版。

女性問題の10週コース。87年オクスフォード飢饉委員会OXFAMとの協力のもとに終日会議「アイルランドと第三世界における女性」等。

青年調査と青年講座。

アルスター大学との共催長期講座「地域社会及び文化研究」（後に、「地域社会関係論」）：コミュニティ間の分裂の実態とその理由を研究、いくつかの「神話」や偏見をなくすだけでなく、地域社会関係改善に関わっている人たちの活動を効果的にするための知識と技能を提供。

89年11月定例総会討議資料「セク特的分断に架け橋をー地域社会をつなぐ、地域社会についての教育ー」：80年代の活動を総括。非セクト主義ではなく反セクト主義。

旧来の4モデルのほかに「文化行動モデル」提起：フレイレの影響を受けながら、労働者階級と他の抑圧されてきた人々が、対話・対論を通して、地域行動や社会行動に取りかかる前に、「なぜ」「何を」「どうするか」探査し、結合することに重点。

## 第5章 地域づくり教育の展開（90-93年）

地域問題に民主的に取り組もうとすればするほど地域内部での対立が明確になり動きがとれなくなることもしばしば。

地域づくりは地方行政と現場の人々との協力と協同がなければ不可能。非教育的な担い手がきわめて重要。

リゴニール改善協議会での、内発的発展の試み。

単なる失業対策のための経済計画とは異なる統合計画。

計画理念は「未来に向かって振り返る」。

「リゴニール地域社会企業」の設立。地域社会が非営利企業を所有。発展が進展すればするほど公的セクターからの実質的援助が求められる。

地域づくりの教育プロジェクト。

青年教育の可能性。

講座：「地域社会発展論」

地域づくりの実践に特に自分たちの社会的・経済的発展の過程を通して関わっていかうとする人々のために設けられる。

ラベットら：地域づくり運動はコミュニティ分断に橋渡しをし、北アイルランドを「ボスニア状態」にすることを防いできた「社会的接合剤」である。

欧米、日本にも共通する流れ：70年代前半の、革新自治体運動につながるような住民運動、70年代後半官僚的・保守的反動が起こり、地域ではそのヘゲモニーを確立すべく「コミュニティ政策」展開。80年代、構造的不況、経済構造調整、バブル経済崩壊、円高不況といった経過の中で新保守主義的政策の展開が見られ、「官僚と企業者の結合」による地域政策展開。これに対し、特に農村部と中小都市では「内発的発展」の方向が模索され、しばしば自治体ぐるみでの地域づくり運動が発展。こうして、現局面では、地域自治体と地域住民、地域産業との「真のパートナーシップ」のあり方が問われるようになってきている。地域づくりは結局は「人づくり」であることが理解され、成人教育・地域社会教育活動の果たす役割が重視されるようになり、地域生涯学習計画が地域づくりと結びつけて展開されてきている。

## 第6章 新発展計画

6つの領域：

権利学習→地域社会関係改善→文化・アイデンティティ→地域社会発展→地域経済発展→政治学習  
政治的のみならず文化的な意味も含めた自己形成、アイデンティティの確立をぬきにした「地域社会発展」は単なる大衆動員、あるいはそれぞれの地域社会・コミュニティの内部に限定された「連帯」におわり、結果としてコミュニティ間の競争・対立をかえってふかめるということになりかねないのである。

「地域社会発展」と「地域経済発展」：

「地域経済発展論」の新設。

ヨーロッパ社会資金は地域社会発展より地域経



済発展を援助するといってくる。

地域経済発展はアルスター大学で開かれることになる（専門性）。

#### エピローグ

「地域とともにある教育」

\*非定型informal教育：学習内容は事前に設定されておらず主にグループでの討論等を通して進められる成人教育。

不定型non-formal教育：非定型教育と定型教育の中間的な形で、他の2形態を組み合わせるだけでなく、課題に対応したセミナー、ワークショップ、諸会議等での学習が重視される。

定型的formal教育：あらかじめ教育内容が設定されており、講師が受講生に講義等の形で働きかける。

カレッジは不定型教育。非定型教育と定型的教育との間には一定の乖離、より明確に言えば矛盾が存在する。その矛盾を解決するための形態が不定型教育。

\*「地域のための教育」：既存の社会教育施設が地域のためになると思われる講座等を開催する。自由主義的地域社会教育では置き去りにされがちな地域や階層を特に対象とするという意味で改良主義。

「地域にかかわる教育」：地域住民が現にあるところから出発、その自己教育過程を援助するような教育実践。

「地域とともにある教育」：地域住民と教育労働者・関連労働者の協同によって創造していく実践。重層的。このうち何が重要になるかは、地域住民の学習活動の到達段階によって決まる。

\*大学改革・再編の動向

94年9月、アルスター大学の成人教育学部(department)は、教育学部ではなく、新学部である「社会科学・健康および教育学部(faculty)」の中の「社会および地域社会科学科(school)」の「成人教育および地域発展」部門として位置づけら

れることとなった。

\*日本の社会教育が学ぶべきもの

地域社会教育実践の構造と展開論理は基本的に同じ。

財源の問題。資金獲得。

ボランティアな組織の役割はもっと重視すべきだろう。

国際的に開かれた成人教育運動の重要性。

#### 9

以上のメモにコメントを加える。

(1) まず、分裂状態のコミュニティの中でなぜアルスター・ピープルズ・カレッジは、どのセクトにも属さないで、中立的な活動ができたのかということである。この点に関しては、ハード面でも、例えばカレッジの施設をどこに置くかといった形で出てきている。プロテスタント地区に位置すればカトリックの人々が、カトリック地区に位置すればプロテスタントの人々が来なくなる。結果的には混住地区に落ちついている。しかし、基本的には、カレッジを支えてきた人々が、徹底して反セクト的だったということではないかと思う。そのことは、カレッジが活動を始めてからの行動軌跡を見てみればはっきりする。79年のディスカッション・ペイパーがすでに反セクト的である。82年に活動を開始してから、初期の活動は文化・政治研究に偏っている感じがするのも、つまり、個々人がしっかりしたアイデンティティを確立していないところで地域全体の問題を取りあげても単なる動員で終わる危険性が高いということを認識していたからだろう。個々の地域住民の中に自発的に変革していこうという契機が生まれなければならないということで、それがメモの第4章のところにも記した「文化行動モデル」の趣旨だろう。この文化行動モデルが、第1章のメモに掲げた自由主義的モデル(地域組織モデル、地域開発モデル)から革新的モデル(地域行動モデル、社会行動モデル)への進展を現実的に保障するものとなるわけだろう。裏からいえば、個人個人がしっ

かりしていないと地域全体としても大きなことはできないということを暗示している。89年の段階では反セクト主義がはっきり前面に出ている。

(2) 次に、上記4つのモデル相互の関係についてであるが、実は最初にこの分類を見たときは、政治的な過激度による分類かと思ったのである。体制から反体制への流れかと。で、真ん中あたりが「中立」ということなのかな、と。そうではないことは、

(1) に述べたことからすでに明らかだろう。例えば、何が何でも大きなサイズの問題を取りあげればいいというのではないということである。だから、社会行動モデルに従うのが一番いいですよというのでも、必ずしもない。まず大きい枠から作っていくというのがある意味で「東洋的」とかと言われたりすることがないでもないが、少なくとも現代においては、そういう進路は現実的ではなくなりつつある。個人の比重が高まっているのは「西洋」に限らない。北アイルランドの場合、コミュニティが分裂状態で、「全体」というのがタテマエとして成り立たなかった。大変なことだが、それにもいい面があるのではないか。95年9月9日、高校生を相手にしてオープンキャンパスで講義をしたが、そのとき話した内容がこれに関連している。講義メモを以下に掲げる。

#### オープンキャンパス講義メモ

##### 1、タテマエ時代の高校生

高校では法律はほとんど学ばない。憲法だけかな。なぜか。「秩序と紛争」について特有の考えが通用しているからではないか。子供には、「臭いものにはみんな蓋」か。

これが大学にはいると一挙に本音レベルになるのです。世の中はトラブルに満ち満ちている。くだらん紛争でいっぱい。

でも、高校だって「世の中」なのである。問題に満ち満ちていることは皆さん十分わかっているでしょう。いじめとか校則とか、大人の世界顔負けだ。

紛争やトラブルが多いのは必ずしも悪いことではない。むしろ、そういうものをちゃんと処理できる

システムを持っているほうが望ましい。そういうシステムがないときは陰湿な結果を招きやすい。

機能の仕方から見ると、法は第1に、そういう、紛争とかトラブルとかの解決のための道具である。

2、法の世界から見た現代：なぜ、どこへといった疑問

トラブルがなくても、そもそも生活全般法でいっぱい。生活というのは法的に見ると、契約と事故の集合と考えてほしい間違いない。多くは法によって強制可能なのである。「冗談ではない」のである。

法は秩序、構造を形づくっていくもの。人生に疑問がない時代は、それを守れば足りる。個人が強くなり、それぞれがそれぞれの生きがいなり死にがいなりをもつようになると、絶えず、何のための秩序なのか、どこに我々は向かっているのかという問いを皆が発信するようになってくる。

個人が尊重されればされるほどトラブルが多く発生するのは当然なのである。その中で日常的なものの多くはコミュニケーションギャップといえよう。どちらかが一方的に悪人であるということは、第三者的に見るとあんまりない。むしろ、激しく憎みあっている両当事者が非常に似ているという確率の方が高い。思いこみのすれ違いである。

「本格的」な紛争になると、外から見ても利害の対立がはっきりわかる。そういった構造は社会全体の価値観とか秩序観とかを反映している。大筋の組み方からして各社会に大きな違いがある。それは「文化」によって構成してきた人間社会の宿命ともいえるし、おもしろさでもある。現代の特徴はそれが、国境を越えはじめたということでしょう。地球規模と言っている問題が増えている。

現代は、「私の問題」と「みんなの問題」の調和が必要な時代なのということになるだろう。

フランス核実験の評価、オウム真理教の事件、阪神大震災等々。大きな問題はみんな二重構造になっているのである。私の問題と公共の問題と。

(3) メモの第5章のところで「地域づくり運動はコミュニティ分断に橋渡しをし」てきたというのも、

地域づくりならみんなこうだというのではないことは  
明らかだろう。日本の場合、「地域経営」的な発想  
が悪い意味で出過ぎている例が多いようにも感じら  
れる。

(1996・2・19 脱稿)

【追記】

本稿校正中の2月9日に、ロンドンでIRAによる  
爆弾テロがあった。(96年2月9日朝日新聞夕刊、  
翌10日同新聞朝刊参照)